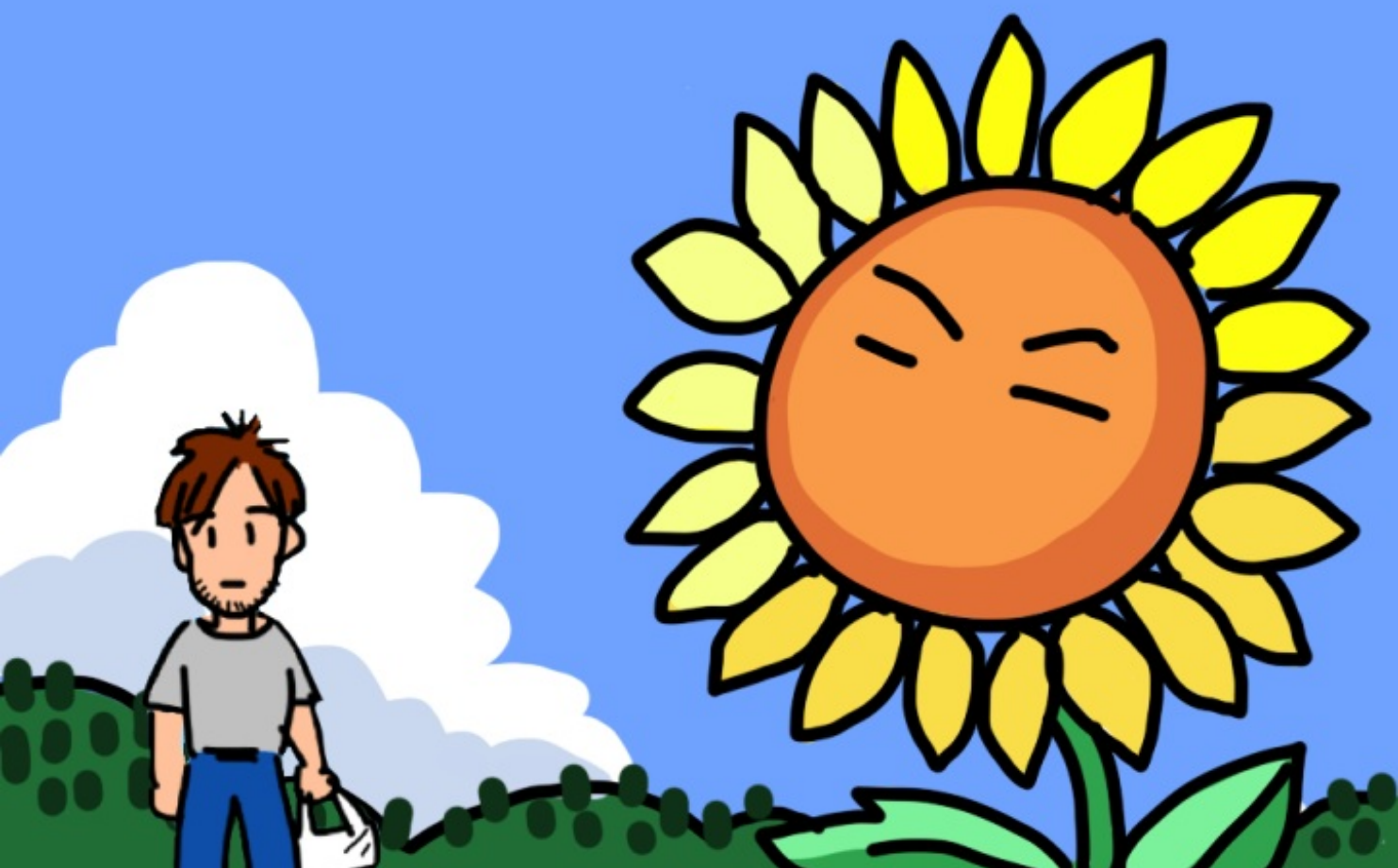


# ココウのひまわり

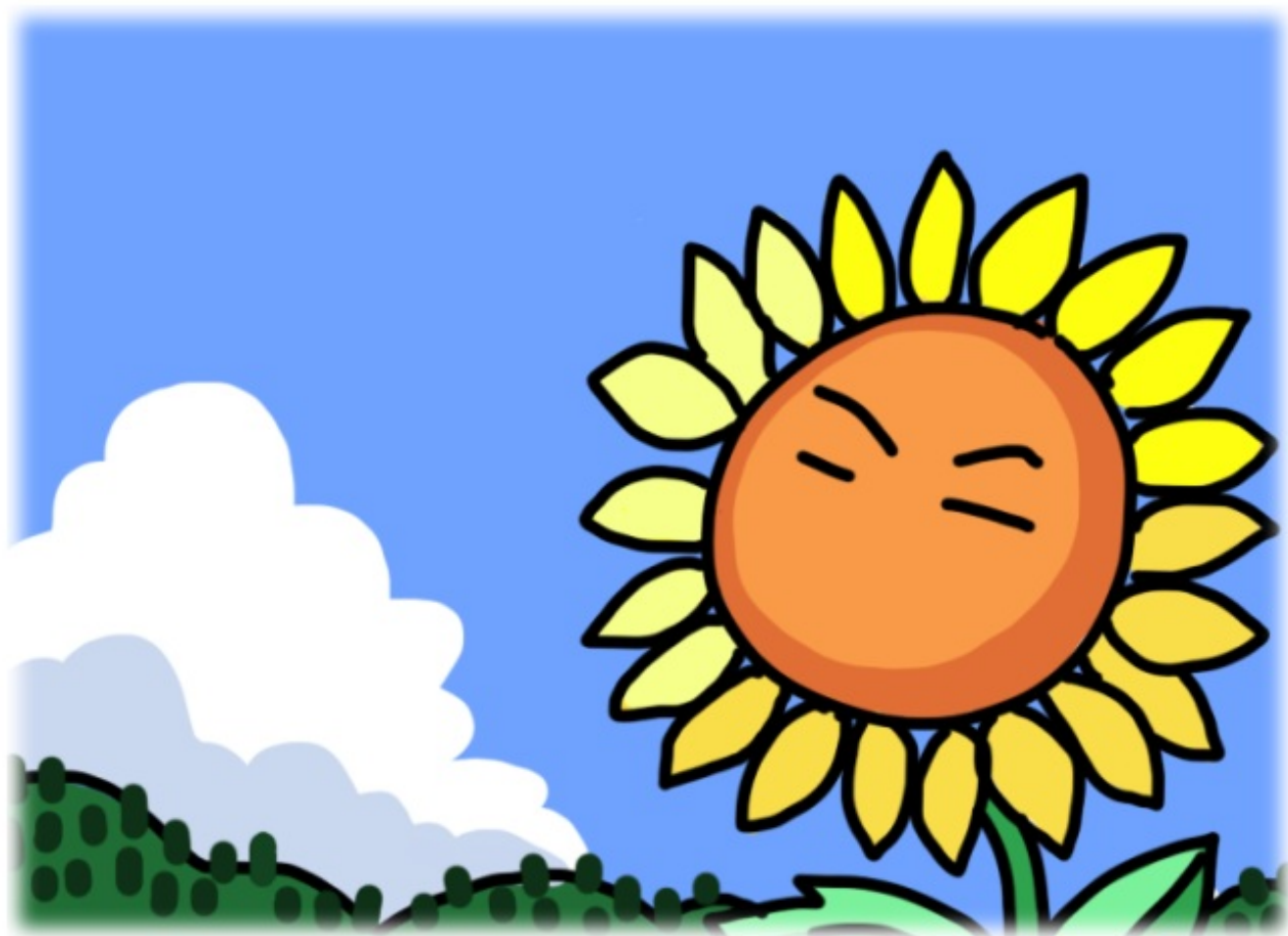
平野文鳥 / 作



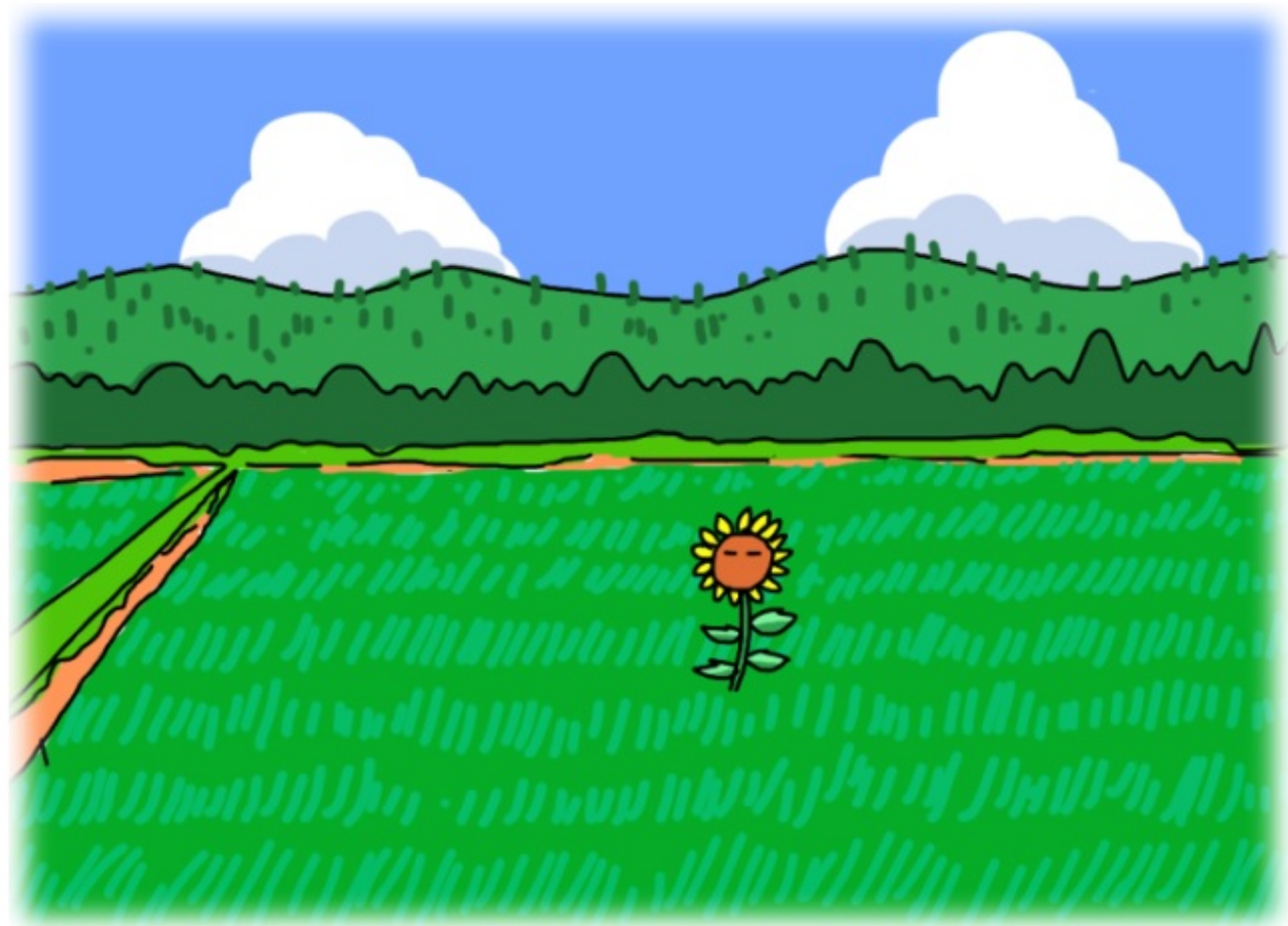
わたしはココウのひまわり。

…だ、そうだ。

「だ、そうだ」と言ったのは、ある男がわたしを見てそう言ったからだ。



ところで、「ココウ」ってどういう意味だ？



しかし、あの男は何者だろう？

私が生まれて太陽が30回のぼった日に突然この村にあらわれ、いつも決まった時間に田んぼのあぜ道を散歩している。

そして、わたしの近くを通りがかるたびにジッとわたしのことを見つめては決まって「俺もあのひまわりのように、一人ぼっちになっても強く生きてゆかねば」と、わけのわからぬことをつぶやいてゆくのだ。

変なやつだ。

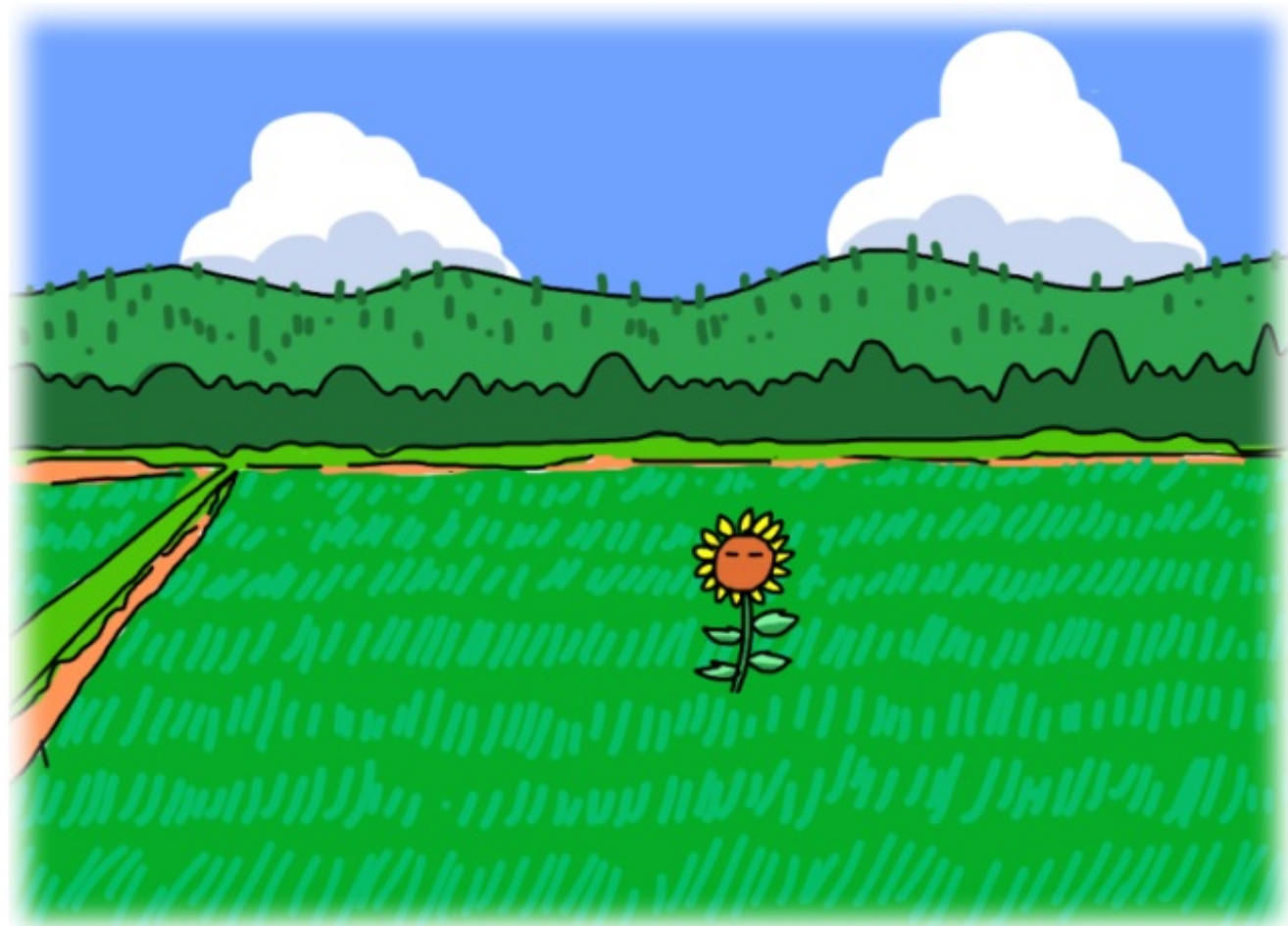


わたしが、なぜこんな田んぼのど真ん中で生まれたのか？  
なぜわたしだけなのか？ その理由はわからないし、べつに知り  
たいとも思わない。

かりにわかったところで何が変わるわけでもないし、出生の秘密  
を知って感傷的になるような趣味もない。

ここで生まれた。そして、ここで生きてる。

ただ、それだけでいいと思ってる。

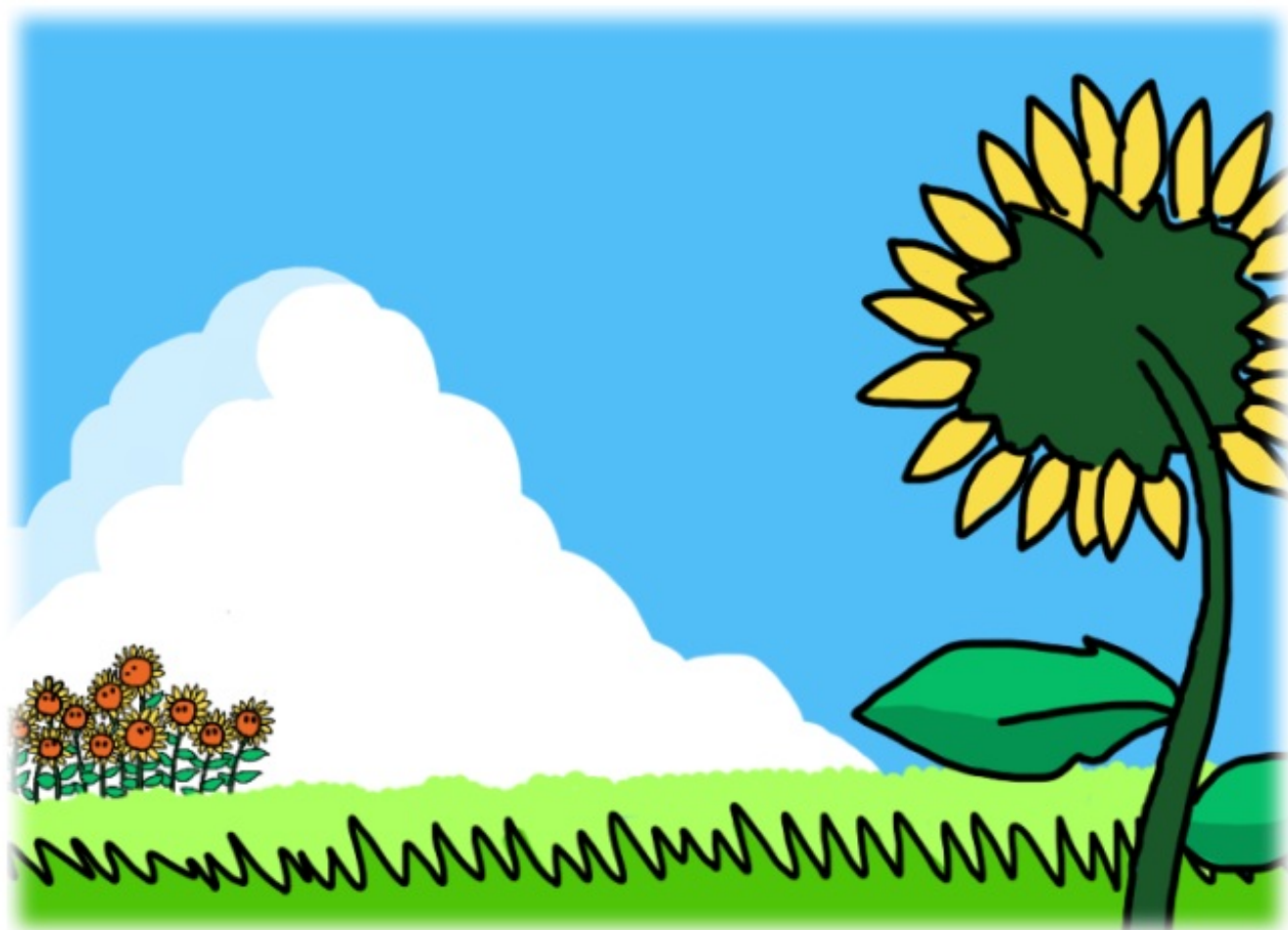


実は、わたしがいるところからちょっと離れた場所に、わたしと同じひまわりたちが密集して住んでいる。見るからににぎやかそうだ。

それと関係あるのかどうかは知らないが、以前、わたしの近くを通った人間の子供が、わたしと密集しているひまわりたちを見比べ、わたしに向かって「一人ぼっちでサビシソウ」と、言ったことがあった。

（サビシソウ？ どういう意味だ）

意味はわからなかったが、どうやらその子どもにとってわたしは「サビシソウ」な存在らしい。



わたしは太陽が大好きだ。

あの輝きを見ていると体に力がみなぎる。だから日の出から日の入りまでずっと見続けている。

そうそう、思い出した。以前、わたしがいつものように太陽を見上げていたらあの男が通りがかり、わたしを見て「ひまわりはマエムキだよなあ」と、つぶやいて去って行った。

(マエムキ？ マエムキってどういう意味だ。太陽と関係があるのだろうか)



あの男の噂を聞いた。

この田んぼで働く二人の年配の女たちが話していたのだ。

なんでも、あの男はトカイでシッパイし、おまけにカソクも失い  
ゼツボウして生まれ故郷であるこの村に逃げ帰ってきたそうだ。

わたしは記憶力は良いのだが、人間の話す言葉の意味が  
ほとんどわからないので、あの男がなぜこの村に帰ってきたのか  
その理由が結局わからなかった。

ただ、年配の女たちはずいぶん楽しそうに話していたので、  
たぶん、あの男は楽しい理由でこの村に帰ってきたのだろうと  
思う。

しかし、そのわりにはあの男のしょぼくれた表情が気になる。





わたしがこの田んぼに生まれて太陽が100回のぼった。途中、空から水が降って大好きな太陽が見れなかった事が二、三度あったが、太陽はわたしにその力を与え続けてくださった。そのおかげでわたしの体もすっかりたくましくなった。顔のまわりの花びらはその黄色を鮮やかにし、葉も大きく、茎も太くなりその緑色も濃くなってきた。自分で言うのもなんだが、われながら立派なひまわりに育ったものだとして誇らしく思える。

ただ、こんなに立派に育ったわたしの姿を見てくれるのが、たまに来る年配の二人の女たちと、あのしょぼくれた男だけというのがちょっと残念な気もする。しかし、だれからも気づかれず見られることもなく消えてゆくひまわりたちに比べればまだマシというものだろう。……いや、いかん。そういう上から目線の比較はちょっとうぬぼれてるな。反省、反省。



太陽がのぼり、そして太陽が沈む。

その繰り返しを何度も何度も見続けられること。そして太陽の光を浴び続けられること。それがわたしにとって最高の喜びであり、永遠に続いてほしいと思っている。永遠に……。しかし、それが無理だということはひまわりであるわたしでも、わかっているつもりだ。

いつか太陽が見られなくなる時は必ずやってくる。だからこそ、わたしがあの太陽の輝きの一瞬一瞬にこの上もない喜びを感じ取れることができるのだということも、わかっているつもりだ。

そう。わかっているつもりだ……。



時のたつのは早いものだ。

わたしが生まれてから、すでに太陽が150回ものぼった。ずいぶん長く生きたものだ。さすがに私も老いを隠せなくなり、顔に私の命をひきつぐ種がたくさんできた。そしてそれら種の重さと、老いで体力がなくなったのが重なり、ついに頭があがらなくなってしまい大好きだった太陽を二度と見ることができなくなってしまった。



すると、いつものようにやって来たあの男がわたしを見てこう言った。

「あいつはうなだれているんじゃない。今度は大地に感謝して、大地を見上げているんだ」

（大地を見上げている？ またわけのわからぬ事を言い出したぞ。やはりあの男は少し頭がおかしいようだ）

そう、わたしは思った。しかし同時になぜか悪い気持ちがしなかった自分にちょっと驚いたりもした。



それから太陽が3回のぼったある日、いつもの時間にあの男がやってきた。ところがどうしたわけか、いつものようなしょぼくれた雰囲気はなく、なぜか見違えるように生き生きとしていた。

「やあ、ココウのひまわりよ！  
おまえのおかげでもう一度やり直せそうだよ」



男はそう言うと、わたしの周りを取り囲んでいる稲をかきわけてわたしに近づき、顔から種をひとつもぎとった。

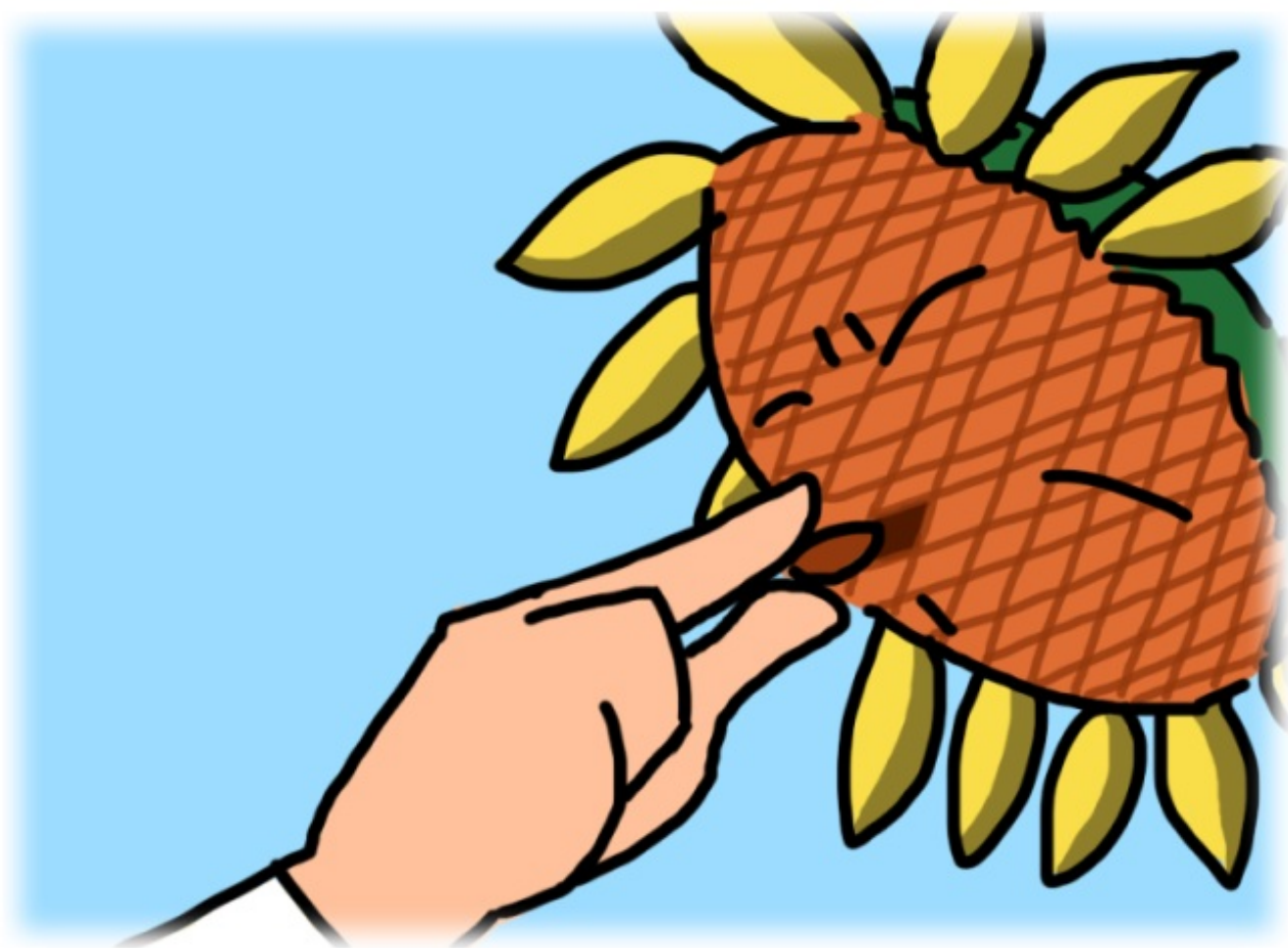
（イタタ！ なにをする！）わたしは怒鳴りたかった。無理だが。

「オマモリにするよ」

男はそう言いながら懐から何かを取り出し、その中に種を入れ「アリガトウ」と言って頭を下げて去って行った。

（オマモリ？ どういう意味だ。それとアリガトウも）

その日から、あの男の姿を見ることは二度となかった。



男がいなくなってから太陽が14回のぼった。

そろそろ自分の命を種にバトンタッチする時が近づいてきたようだ。思えば長く生き続けられたものだ。これもあの太陽のおかげだろう。感謝したい。思い残すことはない……。

いや、待て。ひとつだけ気になることがあった。あの男はわたしのことを「ココウのひまわり」と言っていた。その「ココウ」の意味だ。

しかしそれを知ることは無理というものか。いずれにしても、あの男がわたしのことをそういう風に名付けてくれたことには感謝せねば。他のひまわりたちにはそういうことはあるまい。

ところで、あの男は元気でやっているだろうか？ 願わくば、あの男が持って行ったわたしの種も無事に命芽生えてほしいものだ。それが、どんなかたちであろうとも。

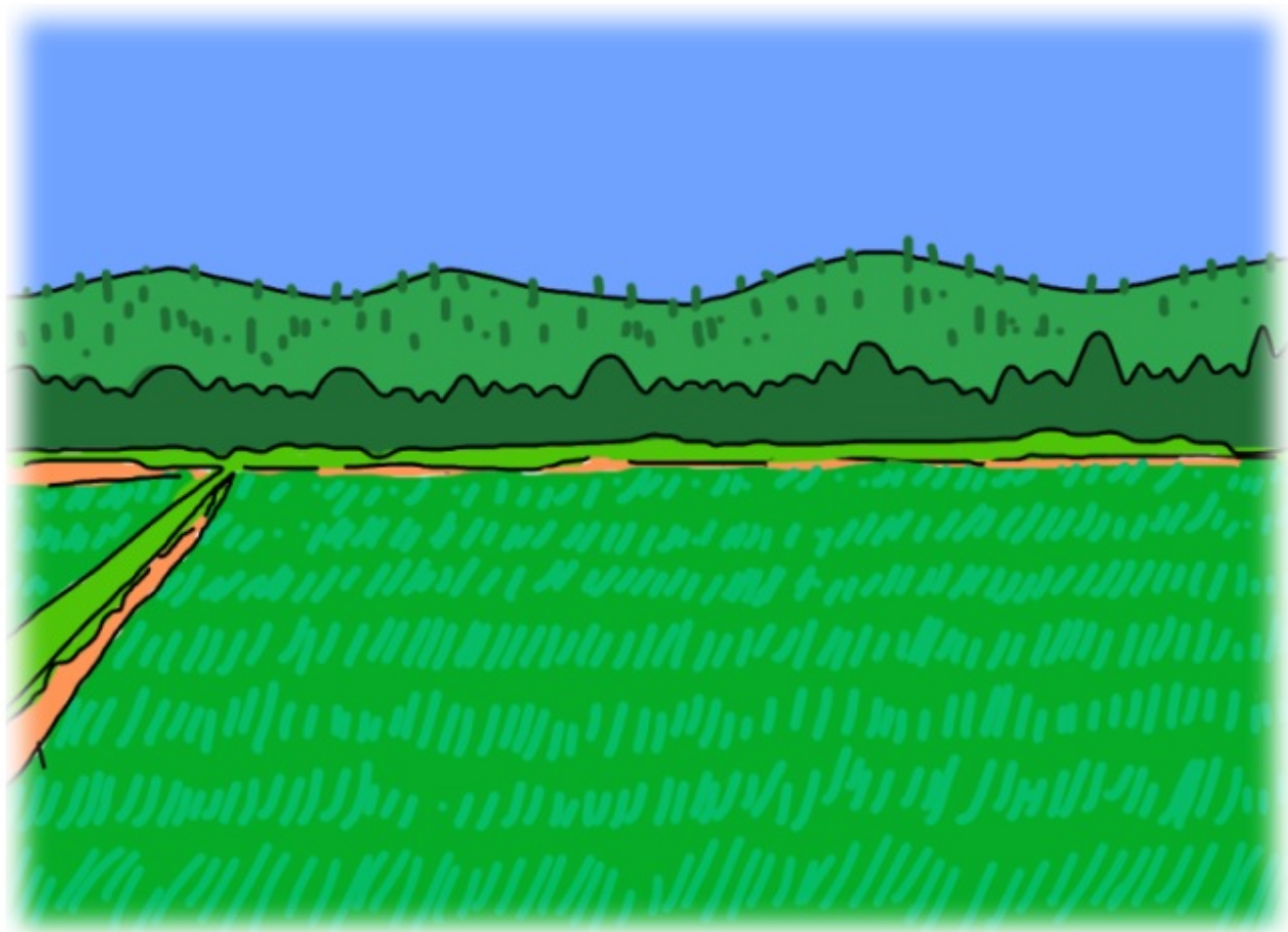


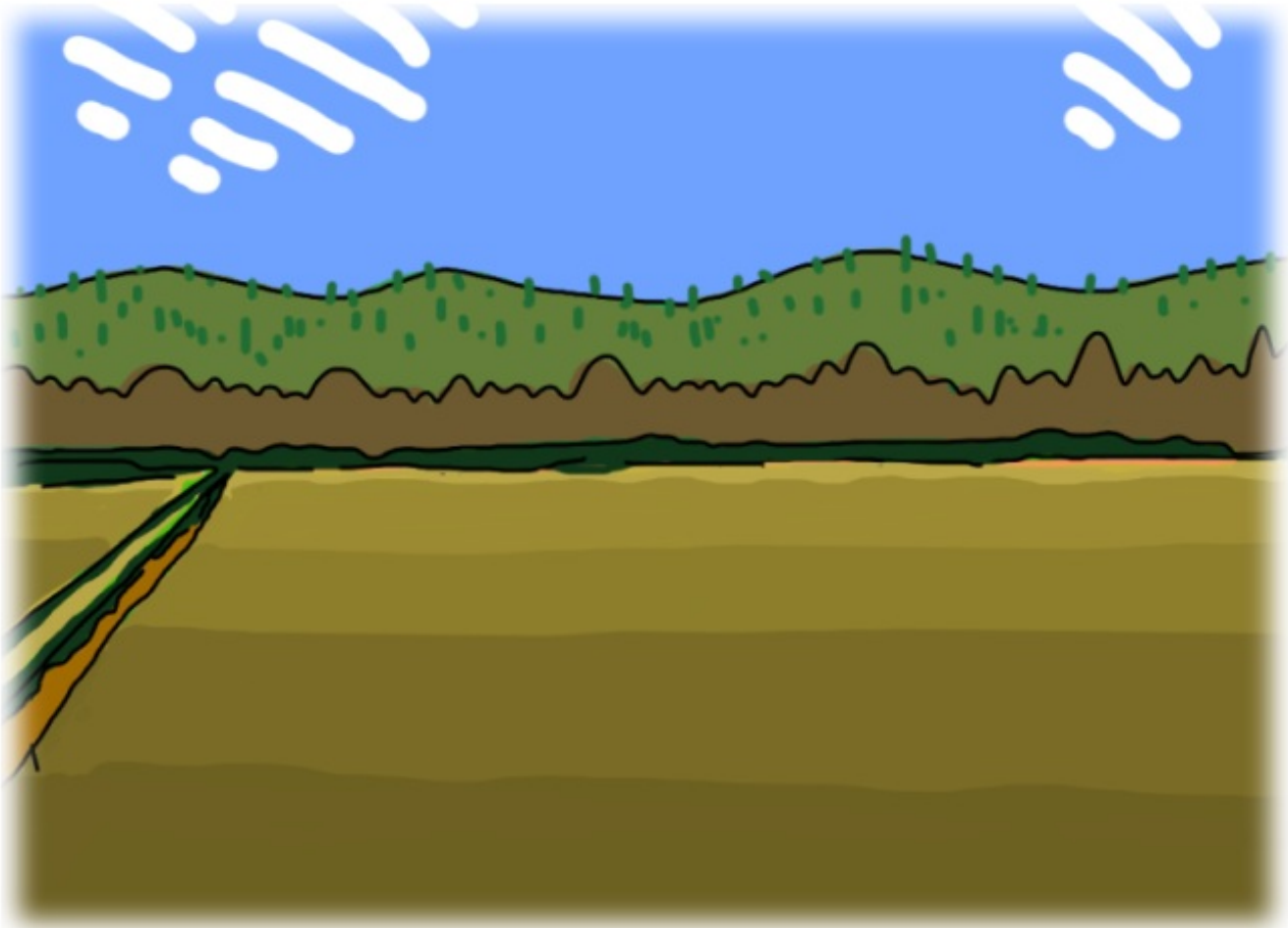
わたしはココウのひまわり。

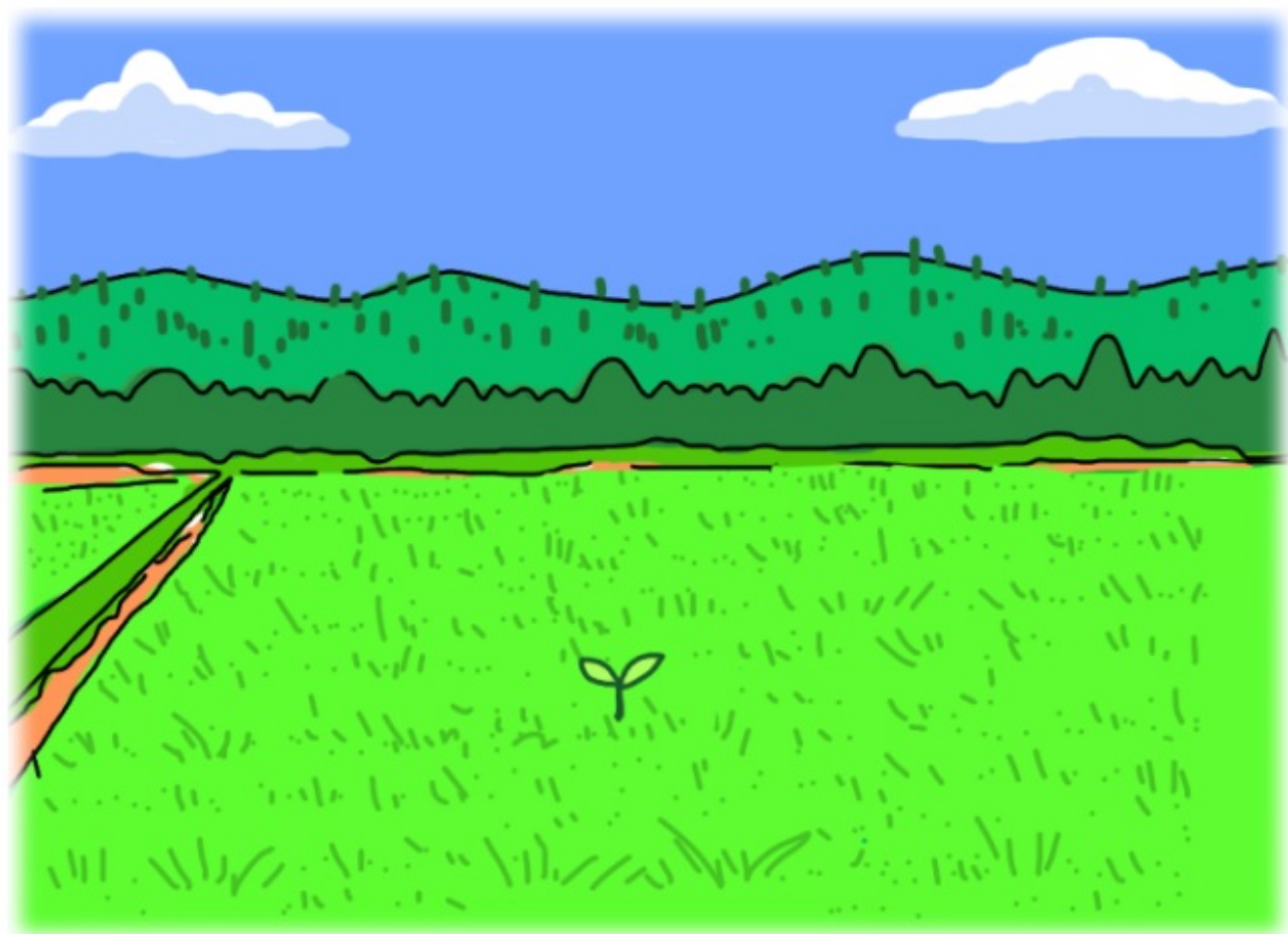
…だったそうだ。











ここう【孤高】

ただひとり、他とかけ離れて高い境地にいること。



この話のモデルになったひまわりと、その種



## ココウのひまわり

---

文と絵 / 平野文鳥

制作 / スタジオ森のげえむ屋さん  
<http://www.mori-game.com/>

---



©2012 SUTUDIO MORINOGAMEYASAN